

# 熊式一のロンドンにおける文学活動 —— 中国古典戯曲の英訳・出版・上演を手掛かりに ——

範 麗 雅

## はじめに

1935年、イギリスのロンドンで「中国芸術国際展覧会」The International Exhibition of Chinese Art in London, 1935-36 (以下「ロンドン展」と略す) が開催された<sup>(1)</sup>。この展覧会の準備・開催期間は劇作家・翻訳家熊式一(1902-91)のロンドン滞在期間と重なった。本稿は、熊の英国での文学・文化活動を、同展の開催に伴う中国芸術に対する国際社会の関心の高まりという時代背景のもとで展開したものと捉え、彼の英訳した中国古典戯曲が英語圏で出版・上演され、好評を受けた様相を明らかにした上で、その意義を検討することを目的とする。それに先立ち、まず熊の経歴と渡英した経緯を簡単に紹介しておく。

熊式一は江西省の南昌市に生まれ、北京高等師範大学(現在の北京師範大学)英文科を卒業した。在学中に演劇に興味を持ち、1929年からオスカー・ワイルドOscar Wilde(1854-1900)、ジョージ・バーナード・ショー George Bernard Shaw (1856-1950)、ジェイムズ・マシュー・バリー James Matthew Barrie (1860-1937) など、近代イギリスの劇作家の作品を中国語に訳し、『小説月報』(月刊, 1910-32年)や『新月』(月刊, 1928-33年)等の雑誌に投稿した。自らも一幕の喜劇『財神』を書き、その才能が徐志摩(1895-1931)、陳源(1896-1970)をはじめ、北京文芸界の多くの知識人に認められた。殊に徐志摩は熊を、近代イギリスの演劇に深い造詣を持つ若手の翻訳家・劇作家として推奨した<sup>(2)</sup>。大学卒業後、熊は一時北京や上海のいくつかの大学の英文科で教え、徐志摩や陳源らの強力な推薦を受けたが、英米留学の経験がないことを理由に大学の専任教授にはなれなかった。これを機に、熊は西洋演劇のさらなる研鑽を図るために、海外留学を決意、1932年の年末に英国に渡り、ロンドン大学に入学した。熊は同大のキングス・カレッジで教鞭を執っていた、シェイクスピア William Shakespeare (1564-1616) 劇の著名な専門家ジョン・R. A. ニコール John Ramsay Allardyce Nicoll (1894-1976) 教授の門下に入り、シェイクスピア劇をはじめ、本場の英国演劇の研究に没頭した。

## 第1節 京劇名作の英訳・出版・上演活動と「ロンドン展」

熊が渡英した1932年は、ちょうど英国人東洋美術品蒐集家パーシヴァル・デイヴィッド卿 Sir Percival Victor David (1892-1964) が「ロンドン展」開催の提案を中英両国の政府に持ちかけた頃であった<sup>(3)</sup>。期を同じくして、「満洲事変」以降、英米諸国から中国へ

の支持を勝ち取るため、また中国芸術文化を世界に向けて宣伝するために、徐悲鴻<sup>じよひこう</sup> (1894-1953) や劉海粟<sup>りゅうかいぞく</sup> (1896-1994) らの近現代中国を代表する芸術家たちがベルギー、ドイツ、イギリス、フランス、スイス、ソビエトなど、ヨーロッパの主要な国々を訪れた。徐、劉らはこれら国々の政府機関、民間の友好団体、東洋芸術品の蒐集家・学者らの協力を得て中国絵画展を開催し、美術品を通しての文化外交を盛んに行った。英国に限ってみても、この時期、徐悲鴻主催のホワイトチャペル・ギャラリー White Chapel Gallery での「パリ中国現代絵画展覧会の英国巡回展」、劉海粟主催のニュー・バーリントン・ギャラリー New Burlington Gallery での「ベルリン中国現代美術展覧会の英国巡回展」など、二つの重要な中国絵画展がロンドンで開催された<sup>(4)</sup>。「ロンドン展」の「予備展」と称されるこの二つの展覧会に象徴されるように、1930年代初期は、中英両国の文化交流がますます盛んになり、英国の知識界は日英同盟以来の親日的な姿勢から、徐々に親中へと切り替わる時期であった<sup>(5)</sup>。熊はこの時代の雰囲気や敏感に察知した。1933年から、中英両国の政府や民間の知識人は「ベルリン中国現代美術展覧会」や「ロンドン展」の準備・開催に向けて動き始めた。熊は海外在住の近代中国知識人の一員としてこれらの展覧会に積極的に携わったが、翻訳家・劇作家としての熊の本領が真に発揮できた領域は、演劇であった<sup>(6)</sup>。

最初、熊は英語で現代中国の国民生活を反映する家庭劇を創作しようと試みた。しかし、ニコール教授のアドバイスで、中国古典戯曲から欧米の一般観客にも受け入れられやすい劇を見出し、英語に訳し、英米で上演する方針に切り替えた。熟慮した結果、熊は最終的に京劇の『紅鬃烈馬』<sup>こうそうれつば</sup> (別名『王宝釧』) を選んで英訳した。1934年7月12日、彼はこれを *Lady Precious Stream: An Old Chinese Play Done into English According to Its Traditional Style* (以下英訳『王宝川』と略す)<sup>(7)</sup> というタイトルでロンドンのマスーアン Methuen 社から出版した (写真1)。

英国詩人・文芸評論家でオックスフォード大学の詩学教授ラッセル・アバークロンビー Lascelles Abercrombie (1881-1938年) は熊の訳文を高く評価し、序文を寄せた。口絵を描いたのは、この時、上記の絵画展を主催するためにロンドンを訪れた徐悲鴻であった。また熊の同郷の友人で書画家の蔣彝<sup>しやうい</sup> (1903-77) は英訳『王宝川』の舞台背景を手掛け、劇本のために12枚の挿絵を提供した。中国の伝統的な書の技法を駆使し、簡潔で堅実な描線で描かれた蔣と徐の作品は熊の美しい英語訳文と相まって、英訳『王宝川』の登場人物の表情や動きを生き生きと映し出した (写真2)。これらの絵画作品は熊の英訳が英米の文壇・劇壇で好評を博するのに大きく寄与した<sup>(8)</sup>。英訳『王宝川』は出版されてまもなく、英国の文芸界に注目され、メディアはこの本を「小さな名著」、「精巧で優雅な本」、「特別な人に贈る良書」などどこぞで称讃した<sup>(9)</sup>。読書界から好評を得た英訳『王宝川』は、翌年の2月に第2刷、36年には第3刷が刊行された。

英国の文芸界から好評を博したことに勇気づけられた熊は、1934年11月27日から、英

国舞台・映画の名女優ナンシー・プライス Nancy Price (1880-1970) 率いる劇団の協力を得て、娯楽施設が多く集中するロンドンのウエスト・エンドのリトル・シアターで英訳『王宝川』を上演した(写真3)。

公演の初日、熊は舞台挨拶を行った。また、当時「ロンドン展」の開催に向けて英国政府やデイヴィッド卿らとの交渉にあたった南京国民政府の駐英公使・郭泰祺(かくたいき) (1889-1952) も舞台挨拶した。郭公使はまもなく開催を迎える「ロンドン展」を念頭に置き、英国人観客に向けて、この劇の上演によって「1935年はロンドンにおける「中国年」になろうとしているようだ」<sup>(10)</sup>と予言した。この日を迎えるために、郭公使は熊の英訳に序文を寄せたアバークロンビー教授をはじめ、多くの英国人文芸評論家を招待する昼食会を公使官邸で開催するなど、舞台裏から熊を応援する活動を行った。しかし、何よりも、郭公使の熱意を込めた舞台挨拶が熊の処女作のロンドンでの初日公演の成功に繋がったと言えよう<sup>(11)</sup>。

その後の公演は順調に行われ、何ヶ月も続き、リトル・シアターは毎晩満員であった。その噂を聞きつけた英国国王ジョージ5世 George V (在位 1910-36) のメアリー皇后 Mary of Teck (1867-1953) とヨーク公爵夫人 The Duchess of York (後のエリザベス皇太后 Elizabeth Bowes-Lyon. 1900-2002) は孫娘(現在のエリザベス女王 Elizabeth II. 在位 1952-) を連れて、少なくとも8回、この劇を鑑賞したという。「ロンドン展」開催期間中の1935年12月から翌年11月までの間に、英訳『王宝川』はロンドンの様々な劇場で上演されて900回以上の公演記録を作り上げた<sup>(12)</sup>。後述するアメリカ公演を経て、1939年11月からは、2年ぶりに再びプライスの劇団によってロンドンの王立劇場で上演された。戦時中と戦後の43年7月、44年6月、47年6月にはシェイクスピア演劇が上演されるリージェント・パーク Regent's Park 内の野外劇場でも、同劇団によって上演された<sup>(13)</sup>。ロンドンだけでも、英訳『王宝川』の公演は1,000回以上を超えた<sup>(14)</sup>。さらに1950年、BBCは同名のテレビドラマを製作し、国営テレビで放送した<sup>(15)</sup>。これらの史実から、現代英国演劇史における英訳『王宝川』の人気のいかに高かったかが窺われる。

英国での出版と上演の成功に伴い、英訳『王宝川』は翌36年の秋からアメリカのブロードウェイで上演され、熊式一夫妻はプレミア(初日)に招待された。熊自身の回想によれば、アメリカでの公演期間は英国ほど長くはないが、その規模は英国より大きかった。英訳『王宝川』のロンドンでの上演開始の14か月後に、ニューヨークでの上演が始まった。俳優と女優の衣装は全部中国本土でのオーダーメイドであり、その演出も当時アメリカ訪問中の京劇名優・梅蘭芳メイランファン (1894-1961) の演技指導を受けた。またニューヨーク以外に、シカゴ、ボストン、サンフランシスコなどでも上演された。その後もこの古典劇は他の外国語にも訳され、世界各地で上演されたという<sup>(16)</sup>。

このように、英訳『王宝川』は1934年にロンドンで出版・上演されて以来、英米両国の演劇界からの好評を博し、世界文壇にも受け入れられた。蔣彝の回想によれば、1935年から36年までの間、英語圏の新聞や雑誌に目を通すと、熊の英語劇に関する記事や論評がほ

ば毎日のように掲載されたという<sup>(17)</sup>。パール・S. バック Pearl Sydenstricker Buck (1892-1973) などの英米小説家・詩人・文芸評論家、林語堂<sup>りんごどう</sup> (1895-1976) や温源寧<sup>おんげんねい</sup> (1899-1984) を中心とする *The China Critic* (週刊, 1928年5月30日-46年6月27日, 以下『中国評論週報』と記す) グループの知識人たちは新聞や雑誌に書評・劇評を寄稿し、熊の翻訳家・劇作家としての才能を讃えた。熊はこの英訳古典劇で英米や国内の文化界で一躍スターになり、英米の演劇界をはじめ、国内外の劇作家・詩人・歌手・京劇名優らと親交を結ぶようになった(写真4, 5)。

では、熊に絶大な名声をもたらした英訳『王宝川』はどのような劇なのか。また熊の英訳には一体どのような特徴があるのだろうか。近年、翻訳学や中国古典戯曲の英語圏での受容研究の角度から、この英訳劇に関する夥しい研究論文が出版された<sup>(18)</sup>。しかし、本論ではこの古典劇の英語圏の演劇界・文芸界での受容を辿るにあたり、「ロンドン展」の開催によってもたらされた中国芸術への学術的な関心の高まりと、それに伴う多言語で著された中国文化理解に関する著述の国際的な出版ブームとの関連性に着目し、『タイムズ』、『アジア』*Asia* (月刊, 1917年1月-46年12月), 『中国評論週報』, *T'ien Hsia Monthly* (月刊, 1935年8月-41年9月, 以下『天下』と記す) など、国内外の英文誌に掲載された代表的な書評を読み解きながら、その人気の秘密を探りたい。

## 第2節 英訳『王宝川』と英米の演劇界・文芸界での評価

英訳『王宝川』の中国語標題は『紅鬃烈馬』で、元々「花園贈金」「彩楼配」「探寒窑」「武家坡」など、13の折子戯<sup>ジョーズシー</sup><sup>(19)</sup>で構成された京劇の名作である。この劇は、梅蘭芳、章遏雲<sup>しょうあつうん</sup> (1912-2004)、華慧麟<sup>かえりん</sup> (1913-64) らの名優たちの度重なる舞台演出を通して、1930年代の中国で男女老若を問わず、あらゆる階級に愛されたメロドラマである。筋書きは以下の通りである。

唐代の宰相王允<sup>おういん</sup>の三女、王宝釧<sup>ほうせん</sup>は自分の意思で結婚相手を選ぶため、繁華街に彩楼(かざりつけた亭)を建て、ボールを投げて婿を決める。ボールはたまたま貧しい青年、薛平貴<sup>せつへいき</sup>に当たった。薛は志が高く気品があり、宝釧は一目惚れする。しかし、父王允はこの結婚に反対する。宝釧は平貴と結婚する意志が固く、最終的に家を出て、平貴が住む寒い窑(洞窟の住居)に赴いて彼に嫁ぎ、父と決裂した。その時、辺境で戦争が起こり、平貴は出征、戦功で「後備督護」という官職を与えられた。王允は義理の息子の戦功を妬み、皇帝に上奏、平貴を左遷させ、魏虎の部下に配属し、遙かな西涼国に遠征させる。平貴は沈痛な思いで新妻に別れを告げ、遠征の途につく。ところが、西涼国の国王は平貴の才能と人柄を愛し、代戦王女を嫁がせた。後に王は亡くなり、平貴は西涼国の国王となった。

ある日、雁がもたらした前妻・宝釧の書簡を読んだ平貴は一気に帰郷の念を募らせ、王女を酒で眠らせた後、帰郷の途につく。国境の三つの関門を突破して18年ぶりに故郷に帰

った平貴は、武家坡の地で妻と偶然に再会する。しかし、18年の歳月で、夫の外観がすっかり変わり、妻は平貴本人であることに全く気づかない。平貴は妻がいまだ貞節を守っているかどうかを確かめるため、道を尋ねるふりをして言い寄ると、妻は質素な家に逃げ戻る。それによって、夫は妻の心が変わっていないことを確かめ、正体を打ち明け、遂に二人は感激の再会を果たした。その時、唐の皇帝が亡くなり、王允は王座を奪うために、兵を出し、平貴を捕えようと画策する。平貴は代戦王女の協力を得て、王允の謀反を鎮圧。戦功を讃えられた平貴は唐の国王となり、宝釧はめでたく王妃となった。

この筋書きは古代ギリシャの長編叙事詩『オデュッセイア』 *Odyseia* とよく似て、中国版の『オデュッセイア』とも言える。この劇はハーバート・ジャイルズ Herbert Allen Giles (1845-1935) が1901年に出版した『中国文学史』 *A History of Chinese Literature* で紹介され、一部のセリフが既に英訳されていた<sup>(20)</sup>。また1930年、梅蘭芳が訪米公演の際の代表作の一つとしてこの劇をニューヨークの舞台で演出した<sup>(21)</sup>。従って脚本と舞台から、英語圏の観衆はこの劇を受け入れる下地ができていた。しかし、「異化的」と「同化的」<sup>(22)</sup>な翻訳法で訳されたこの古典劇が英語圏の演劇界・文芸界に歓迎された最も重要な要因は、管見では以下の2点ではないかと思われる。

一つ目は新しい内容や登場人物を原作に付け加えたことである。西洋の近代演劇と中国の古典戯曲に精通した熊は、元々13幕の京劇を簡潔に4幕の話劇に濃縮した。その上、西洋人観衆のキリスト教の倫理観やオリエンタリズム的な眼差しへの配慮から、原作の内容を大胆に書き換えた。例えば、原作の一夫多妻制を一夫一妻制に書き換え、原作にはない「庭園での賞雪・作詩」という場面を付け加えた。王宰相一家が新年を祝うために、梅の花が満開の庭園で宴会を開き、青年男女が雪を鑑賞し、詩を詠む場面は、東洋的風情に満ち溢れる。こうした「賞雪」や「賞月」は、中国政府が「ロンドン展」に出品した《溪山暮雪図》や《賞月空山図》<sup>(23)</sup>などの絵画に象徴されるように、中国の古典絵画や詩歌の伝統的な題材である。熊が作り上げたこのロマンチックで優雅な世界は、18世紀のヨーロッパを風靡した「中国趣味」を再現すると同時に、実際の中国伝統社会で、文人・士大夫階級の日常家庭生活の一場面でもあった。それ故、この場面は人生を芸術化する中国文人の趣味生活を巧みに「演出」した。またそれは、蔣彝が筆と墨で描いたエキゾチックな舞台背景とうまく調和し、英国観衆を中国絵画の静謐で幻想的な世界へと誘った。

「賞雪」の場面が、20世紀初期の欧米知識人が抱いた理想の「東洋像」にいかに見事に合致したかは、アバークロンビーの序文をはじめ、英米の新聞や雑誌に掲載された数多くの劇評・書評から窺える。アバークロンビーは審美的に描かれたこの場面を以下の文面で讃えている（傍点の強調は原文、丸括弧内は引用者による）。

賞雪！そここそ、熊氏が我々西洋人の心にかかる魔法の精髓がある。彼の（筆端に現れた）これらの魅力的な人物たちは、我々の持っていない秘密、即ちいかに生きる

かについての秘密を持っている。そしてそれこそ、我々が彼ら（登場人物）の生活や運命のロマンスに引き込まれる際に、彼らが我々に伝えてくれるものである。宰相たちが賞雪のために庭園で宴会を開き、新年を祝うこの世界は、夢幻的な非現実ではない。そのような出来事はダウニング街（英国首相の官邸、転じて英国政府を指す）では起こらないだろうが、それにも拘わらず、「宝川」を乙女の名とする熊氏のこの世界は、優雅で上品な、それもきわめて人間的な現実なのである。<sup>(24)</sup>

アバークロンビーの称讃をゴールズワージー・L. ディキンソン Goldsworthy Lowes Dickinson (1862-1932) やローレンス・R. ビニヨン Laurence R. Binyon (1869-1943) などの英国知識人が20世紀初期に出版した著述で謳歌した「中国像」と読み比べると、両者がよく似ていることに容易に気付かされる<sup>(25)</sup>。例えば、ビニヨンは『極東の絵画』*Painting in the Far East* という著書で日本人芸術家がパリで雪を鑑賞するエピソードを紹介した際、「花、月、雪、大地と空気を表すこれら三つの美は、極東芸術において独特の栄光と神聖性を持っている」<sup>(26)</sup>と語っている。この叙述はアバークロンビーの称讃に一脈相通じるし、いずれも両大戦間の英国エリート知識人による東洋に関する想像から生まれた産物であろう。彼らが抱いたこうしたロマンティックな「東洋像」こそ、熊の劇作が英語圏でベストセラーとなった文化背景であった。

そして、熊の訳が成功を収めた二つ目の要因は、「同化的」な翻訳による訳文の質の良さである。それは主に以下の3点に集約されている。

1. 劇の背後に隠れた歴史や文化背景について、英語圏の読者や観衆の理解を深めるために、熊がジェイムズ・バリーやバーナード・ショーの喜劇を真似て英国の“Familiar essay”<sup>(27)</sup> 的な文体で幕ごとに書いた解説文。
2. 京劇の唱詞やセリフを脚韻を踏んだ英語詩に完璧に訳したこと。
3. 中英両言語の駄洒落を巧みに生かした登場人物のユーモラスなセリフ。

1と3は以下の温源寧や林語堂の書評を交えて検討するが、ここではまず熊が京劇の唱詞をいかにリズム感のある英語詩に訳したかの例を挙げておこう。例えば、第1幕の「彩楼配」（原脚本は第2幕）で王宝釧の求婚者たちが歌う唱詞と、第3幕の「趕三関」（原脚本は第2幕）で、西涼と唐のあいだの関門まで平貴を追いかけてきた王女の二人の部下、馬達・江海のセリフがそれぞれ以下のように訳されている。

「彩楼配」（第2幕）

*Lady Precious Stream* (Act II)

生唱揺板：二月二日龍台頭。

1st Suitor: Lady Precious Stream is as beautiful as the flower of May!  
(末唱) (門官上) : 三姐打扮上彩樓  
2nd Suitor: The second of February is her wedding day!  
小生唱 : 但願彩球到我手,  
3rd Suitor: The young suitors came here happy and gay!  
(丑唱) : 列位。我与三姐軋姘頭。  
4th Suitor: Who will be the lucky one, nobody can say!

生が揺板を唄う<sup>(28)</sup> : 二月二日の龍頭の祭り。  
求婚者1 : Lady Precious Streamは五月の花のように綺麗だ!  
末が唄う (門番の登場) : 三番目のお嬢さんはおめかしして、彩樓に登る。  
求婚者2 : 二月二日は彼女の結婚の日!  
小生が唄う : 彩球が我が手に渡るよう願うばかり。  
求婚者3 : 若い求婚者はここに来て嬉しい!  
丑<sup>(29)</sup> が唄う : 諸君、三番目のお嬢様と結ばれるのはこの私。<sup>(30)</sup>  
求婚者4 : 幸運な人は誰なのか、誰も言えない!<sup>(31)</sup>

「趕三関」(第2幕)

*Lady Precious Stream* (Act III)

馬達 (念)<sup>(32)</sup> : 家住在北国,  
MA TA. Our home is far, far in the North-west!  
江海 (念) : 説話不利落。  
Kiang HAI. We are somewhat tongue-tied!  
馬達 (念) : 吃的是牛羊肉,  
MA TA. Beef and mutton are what we like best!  
江海 (念) : 騎的是大駱駝。  
Kiang HAI. Big camels are what we ride!

馬達 (セリフ) : 家は北国にあり,  
馬達 : 我々の家は遠く、遠くの西北にあり!  
江海 (セリフ) : しゃべれば舌足らず。  
江海 : 我らは幾分舌足らず!  
馬達 (セリフ) : 食べるのは牛肉と羊,  
馬達 : 最も好きなのはビーフとマトン!  
江海 (セリフ) : 乗るのは大きな駱駝。

江海：乗るのは大きな駱駝！<sup>(33)</sup>

以上の中国語原文と英訳を読み比べると、熊は唱詞とセリフによって、それぞれ異なる訳し方を取り入れたことが分かる。ほとんどの京劇の唱詞は脚韻を踏んだ漢詩のような仕組みである。そのため、熊は「頭」<sup>tóu</sup>「楼」<sup>lóu</sup>「手」<sup>shǒu</sup>「頭」<sup>tóu</sup>という“ou”の脚韻を踏んだ上記の4句の唱詞を“May,” “day,” “gay,” “say”という英語の“ei”の韻を踏んで訳した。逆に登場人物の会話は詩ではないから、「国」<sup>guó</sup>「落」<sup>luò</sup>「駝」<sup>tuó</sup>という脚韻を踏んだ馬達と江海のセリフを“est,” “ied,” “est,” “ide”というABAB式の韻を踏んで訳した。こうした言葉の音楽的リズム感とユーモア感が溢れて多様性に富む訳例は、英訳『王宝川』に数多く見出せる。これらの優れた訳文はシェイクスピアの詩劇をはじめ、バリーやショーなどの多くの劇作家の傑作に培われた英国の読者や観衆の好みにぴったりと合い、彼らの心を強く惹きつけた重要な要素の一つであった。

『紅鬃烈馬』の唱詞とセリフを多様な方法で訳したのは、中国と西洋の演劇に精通した熊式一ならではの考えによるものである。即ち中国古典戯曲が重んじるのは「表演」(演じること)である。中国観衆は歴史や文学作品に基づく戯曲の筋書きを知り尽くしている。彼らが見たいのは豪華な舞台装置や俳優・女優たちの独自の演技力や歌唱力である。それに対し、英国演劇が拘るのは「表現」(意味を伝えること)である。英国観衆は脚本に書かれたセリフや俳優たちのセリフを通して歴史背景や物語が伝わることを期待する。従って英語による脚本は言葉の意味を明晰に伝えることが重要視され、登場人物のセリフの一つ一つには英国人のユーモアや機知が溢れ、英国観衆は演出者のセリフを通して言葉の余韻を味わう。だが、中国人観衆向けに書かれた『紅鬃烈馬』のような古典戯曲のテキストは、異質な言語圏の読者/観衆にとって、登場人物のセリフに難解な詩や戯曲の専門用語が大量に挿入され、それ自体、翻訳者が戯曲テキストを英訳する際の大きな障害物となっている。

しかし、熊は中国古典戯曲固有の煩雑で冗長な部分を惜しみなくばっさり切り捨てた。その上、英国観衆の価値観や好みに合わせるために、翻訳の忠実性を考慮せず、内容を大幅に書き直した。こうした作業を加えられた中国の古典劇は、ロンドンの舞台上で上演される際、英国観衆にとって遠い見知らぬ国の物語ではなく、娘に不釣り合いな結婚相手を巡って英国貴族の家庭で繰り広げられる喜劇に見事に変えられてしまった。英国観衆は朗読者<sup>(34)</sup>の生き生きとした解説や登場人物のユーモア溢れる会話から劇の内容を理解でき、より親近感を感じるようになったと思われる。つまり東洋的なムードの「演出」(「異化的翻訳」とバリーやショーの喜劇の文体を取り入れたこと(「同化的翻訳」)が、この古典劇が英米の劇壇・文壇から好評を受けた最も重要な決め手ではないかと思われる。

こうした要素に対する英米の劇壇や文壇からの評価は、『タイムズ』を中心とする英国の主要なメディアに掲載された劇評や書評に現れている。書き手たちはみなこぞって、「杏花」「蝶々の翼にある粉羽」「昨夜の夕日」「草葉の露」「太陽の光の下の白霜」「精緻な瓷器



の Copp のような繊細なファンタジー」といった言葉で熊の英訳を絶賛する<sup>(35)</sup>。これらは、後に『タイムズ』などに掲載された、中国政府から「ロンドン展」に出品した絵画、瓷器、織物を讃える論説にも頻繁に登場する語彙であった<sup>(36)</sup>。さらにこれらの新聞や雑誌は、英国人観衆がこの劇に夢中になった主な理由を以下のように述べている。英訳『王宝川』は、「新鮮かつ神秘的で愉快な物語であり」、「生き生きとした中国人の家庭生活と習俗を表す風俗画のような舞台」を通して、「観客たちはあたかも休暇中のような寛いだ感覚を味わう。」<sup>(37)</sup>「素朴で美しく、文体と言語の清新さを持つこの古典劇は大都会のロンドンに住む観客たちにとって、何も深い内省や分析もなく、まるで親しみを込めた心地よい声でゆっくり語られている物語を聞くような、心身とも寛いだ気持ちになる。その出版は英語文学を豊かにした」<sup>(38)</sup>と。しかしながら、1934年から35年にかけて英米の芸術誌や文芸誌に掲載された英訳『王宝川』についての主な書評・劇評に目を通すと、以上のような英訳『王宝川』の「異国趣味」的な要素に魅せられて同劇を評価した英米の書き手たちに比べ、パール・バックの書評は長く中国に住み、中国の国民生活を肌で感じ取り、中国古典戯曲芸術を真に理解できた者の言葉と言えよう。

この書評はバック自身が主宰する『アジア』の書評欄に発表された。冒頭で彼女は、1930年のアメリカ各地の公演でメディアや観衆から称讃を浴びた梅蘭芳を論評の視野に入れて、梅、熊を西洋に中国古典戯曲を伝える「中国戯曲芸術の大使」と称えた。そして梅、熊の芸術活動が西洋の演劇界に与えた影響について、彼女は次のように述べた。テキストと舞台演出両方において、戯曲芸術に関する中国人の考えは西洋演劇の理念と全く異なる。しかし、梅の優れた演技力や伝統劇に対する大胆な解釈を通して、アメリカ人は今やすっかり京劇の魅力に惹きつけられた。今度の「芸術大使」は熊式一である。彼の英訳劇は昨年英国で出版・上演されて大成功を収めた。この劇はニューヨークでも出版され、公演される予定であると<sup>(39)</sup>。ここからバックは本題に入り、この古典劇を開催中の「ロンドン展」と関連づけながら、文学と演劇の複眼的視点から英米両国での出版と上演の意義を次のように指摘している。

熊氏はこの非常に古い中国古典戯曲の翻訳を、私から見ればそうあるべき唯一の方法で提示している。つまり彼は、これを貴重だが偉大ではない文学だなどとは全く考えていない。中国戯曲は、中国社会においてつねに正統性を持つ娯楽手段の一つではあっても、中国で文学と看做されることはめったになかった。私がこれ（娯楽）という言葉によって意味するのは、喜劇的な娯楽ではなく悲劇的な娯楽である。というのも、人生とは本質的に悲劇的なものだからである。この劇は、中国伝統の文学的語彙や構造に合致していないため、中国では文学と認められていないにも拘わらず、実際には文学である。それと同様に、この劇の英訳もまた、偶然だが文学になっている。しかし、誠に熊氏が言うように、この劇はこれまで何百万人もの人々から感動の涙や

喜びを引き出した。この劇の感情の素朴さや風俗の陽気さが、再び海の向こう側にいる人々を感動させるかどうかを見るのは興味深いことだろう。いずれにせよ、この中国戯曲芸術の提示は、バーリントン・ハウスで展示されているいずれの中国絵画にも劣らず、それなりの重要性を持っている。そして、もしもこの劇の舞台演出がその翻訳と同じように、巧みに手掛けられるならば、成功は間違いない。<sup>(40)</sup>

以上、熊の英訳した中国古典劇がそのエキゾチックさと新鮮さによって、いかに英語圏の読者や観衆をうっとりさせ、彼らの心を虜にしたかを、『タイムズ』や『アジア』の代表的な書評を通して検証してきた。それでは、海外で高い評価を受けた熊の古典戯曲の英訳・上演活動に対して、国内にいる林語堂、温源寧らのバイリンガル著述家たちはどう反応したのだろうか。

### 第3節 英訳『王宝川』と中国国内の演劇界・文化界

英訳『王宝川』の海外での出版と上演の成功は中国国内の文化界で大きな反響を呼んだ。同書が出版された1934年の年末、元北京大学の英文科教授で英国文学に造詣が深い温源寧は早速『中国評論週報』に書評を寄稿、熊の訳文の質の良さを褒め称えている。温の主張によれば、読者が英訳『王宝川』に感じるのは、翻訳を読むような感覚ではなく、むしろアイルランド人貴族小説家ダンセイニ卿 Lord Dunsany (1878-1957) の言語表現とバリーの文体とが渾然一体化したファンタジーを読む感覚である。このような英語圏の劇作家の作品に匹敵するほどの傑作を世に送り出したのは、多くの英国劇作家の作品を中国語に訳したことで培われた、イギリス英語の味わいとユーモアを持つ熊氏の素晴らしい語学力によるものだ。特にバリーの劇作は、読者を暖かく包むようなゆったりとした格調や、登場人物が打ち解けた雰囲気の中で、親友同士のような気軽さで楽しむ機知に富む会話といった、18-19世紀の英国で繁栄した“Familiar essay”的な文体を特徴としている。こうした特徴は熊の解説文や登場人物の会話によく見受けられるという<sup>(41)</sup>。温はこの書評で、自らの論点を裏付けるために、第3幕の冒頭に書かれた西涼国の習俗を紹介する熊の解説文を一つの例として挙げ、バリーやショーらの喜劇の中国語への翻訳を通して身に付けたイギリス英語のユーモアと読者に語りかけるような文体を、熊はこれらの解説文に見事に再現できたと強調している<sup>(42)</sup>。温の評価を換言すれば、英訳『王宝川』の成功の秘訣は、熊がこれら英国劇作家の作品から学んだ言語表現や文体を巧みに自身の英訳や解説文に活用したことである。

なお、この英訳劇は文芸界にとどまらず、国内の演劇界からも注目を浴びた。1935年6月25日から26日にかけて、同劇は上海在住の外国人やミッション系スクール出身の中国人が作った「万国芸術劇院」によってカールトン劇場 Carlton Theatre で上演された。ヒ

ロインの王宝釧を演じたのは、古典戯曲と外国語に精通する上海社交界の名媛、唐瑛(1910-86)だった(写真6)。彼女の優れた演技は大きな話題となり、この劇に関する記事はロンドン上演の舞台写真とともに、『中国評論週報』や『良友画報』(月刊, 1926-68年)など、上海発行の中英両言語の新聞や雑誌の第一面を飾った<sup>(43)</sup>。

「万国芸術劇院」の公演を観た林語堂は、1935年7月4日に『中国評論週報』に劇評を寄稿し、脚本の素晴らしさと唐瑛の優れた演技力を称讃した<sup>(44)</sup>。この時、『中国評論週報』『天下』は林の劇評以外に、ぜんしゅうしょ 銭鍾書(1910-98)、ようこく 姚克(本名は姚莘農, 1905-91)、ちんじゆい 陳受頤(1899-1978)らが執筆した古典戯曲論も多数掲載した<sup>(45)</sup>。なかでも林が、上述の劇評を発表した翌月の『天下』創刊号に寄稿した書評は極めて重要な文章である<sup>(46)</sup>。熊が試みた「異化的」「同化的」な翻訳を詳細に分析したこの長い書評に、海外で英語による中国古典芸術文化を紹介する熊の文筆活動への林の強い関心が垣間見える。

実はこの書評を執筆した1935年の夏は、ちょうど林自身がバック夫妻との約束で、これまで『中国評論週報』を中心に国内外の英文誌に発表した中国文明論のエッセイを単行本に纏めようとする時期であった。自分より若い、海外にいるという好条件に恵まれ、先に英語圏の劇壇・文壇で名声を手に入れた熊は、林にとって羨望の対象となり、知的な刺激ともなった。殊に「ロンドン展」の影響で、この時期から中国古典文学の英訳を数多く手掛けた林は、熊が英訳『王宝川』で行った大胆な翻訳から多くの示唆を得たに違いない。それは林の書評にはっきりと映し出されている。林はまずこの中国古典戯曲の英訳傑作を生み出した時代背景としての「ロンドン展」に触れながら、次のように書き出している。

中国は今年ロンドンの大衆と良い巡り合わせに恵まれそうである。郭泰祺大使が表現するように、1935年はロンドンにおける「中国年」になろうとしているようだ。熊氏の劇への惜しみない称讃と心のこもった歓迎ぶりは、中国の国民生活のより親密でゆったりとした側面への一層深い理解を示すよい前兆のように思われる。西洋の芸術世界は今や、熊氏の訳文の美しい英語と、英訳『王宝川』の陽気な精神とに慣れ親しんでいる。この劇の成功の要因はどれだけが中国語原作によるものか、どれだけが並はずれた流暢さを持つ翻訳者としての、また中国と西洋両方の演劇技法に関する豊富な知識を持つ劇作家としての熊氏の才能によるものなのかを分析するのが我々の目標となるだろう。<sup>(47)</sup>

次に林は熊の創造的な翻訳の手法に着目し、二つの側面から熊の翻訳を論じた。一つは、従来ばらばらの構成だった『紅鬃烈馬』を、統一感のある4幕の話劇に圧縮した熊の大胆な試みを高く評価したことである。林は昆曲『綴白裘』(清・玩花主人編、せんたくそう 銭徳蒼増補)の中の「思凡」を英訳し、北京や上海で京劇女優の3時間に及ぶ『紅鬃烈馬』の演出を鑑賞した個人的な経験から、このような伝統劇が英語で上演される時、異国の観衆に物語の一

体感を与えるため一定の書き直しは避けられないと認識していた。しかしその一方、林の考えでは、熊は単に上演時間を短縮するために書き直しただけではなかった。熊の英訳には、若手翻訳者の自由で大胆な創作も含まれていたという。林はこの大胆さを肯定的に捉え、

一つ確かなのは、熊氏が卑屈な翻訳者ではなく、ここでは自らが半ば創作者だということである。彼は逐語的精確さが何を意味するのかも知らない陽気な若者の、最初の素晴らしい熱狂を持ち合わせている。さもなければ、彼の素晴らしい英訳は不可能だっただろう。<sup>(48)</sup>

と評価している。

この書評で林は、ユーモア溢れる原作を熊がいかにも大胆に巧みに訳出したかを示す例として第3幕を取り上げた。これは元々京劇の折子戯の「趕三関」の第5幕で、西涼国から帰国の途についた薛平貴が突破しなければならない三つの関門の一つを守る、年寄いた耳の遠い唐の將軍・莫將と、平貴を追いかけた王女の部下、馬達・江海との会話によって成り立つ喜劇性に富む場面である。

熊はこれを英訳劇の第3幕に書き変え、莫將の耳が遠いせいで馬、江とのやり取りで聞き間違った中国語の諧音詞<sup>(49)</sup>から生じる喜劇的効果を、英語の駄洒落を通して再現しようと試みる。まず中国語の原文と熊の英訳を見ておこう。

#### 「趕三関」(第5幕)

馬達、江海(同白): 老頭請呢!	Ma ( <i>calling aloud</i> ). Hey, my old man!
莫老將軍(白): 老頭不玩火球。	Mu. Old moon? We can't see the old moon until midnight.
馬達(白): 老将!	Ma. My old general!
莫老將軍(白): 老姜到菜市買去。	Mu. Old ginger? Buy it at the market where vegetables are for sale.
馬達(白): 大王!	Ma. My king!
莫老將軍(白): 大黃藥店買去。	Mu. There is no kinsman of yours in China.
江海(白): 主子!	Kiang. My master!
莫老將軍(白): 肘子要到肉店里買去。	Mu. Mustard? Go to the grocery for it!
	Ma. My Lord!
	Mu. He is in Heaven.
馬達、江海(セリフ): ご老人、さあどうぞ!	

馬 (大きな声で) : おい, おやし!  
莫老將軍 (セリフ) : 老人は火球で遊ばず。<sup>(50)</sup>  
莫 (セリフ) : 古い月? われらは夜中にならないと古い月を見られん。  
馬達 (セリフ) : 老將軍!  
馬 (セリフ) : 老將軍!  
莫老將軍 (セリフ) : 古い生姜は市場へ買いに行け!<sup>(51)</sup>  
莫 (セリフ) : 古い生姜? 野菜が売られておる市場で買いなさい。  
馬達 (セリフ) : 王様!  
馬 (セリフ) : 王様!  
莫老將軍 (セリフ) : 大黃は薬局へ買いに行け!  
莫 (セリフ) : 中国にはお前らの親類はおらぬ。  
江海 (セリフ) : ご主人様!  
江 (セリフ) : ご主人様!  
莫老將軍 (セリフ) : 肘肉は肉屋へ買いに行け!  
莫 (セリフ) : マスタード? 雑貨屋へ買いに行け!  
馬 (セリフ) : わが主よ!  
莫 (セリフ) : 彼は天国にいます。<sup>(52)</sup>

上記の中国語セリフと熊の英訳をつき合わせると、熊は必ずしも原作を忠実に訳していないことが分かる。しかし、こうした一定の取舍選択を通して訳されたからこそ、登場人物の滑稽な性格は生き生きと現出したのである。とりわけ熊は以下の中国語の諧音詞を巧みに英語の駄洒落に置き換えたことで、意味のみならず原作の喜劇性をも英訳に持ち込むことに成功したと言える。

中国語原文の諧音詞	熊の訳文における英語の駄洒落
老頭=火球	old man (老人) =old moon (古い月)
老将 (年配の將軍) =老姜 (古い生姜)	old general (年配の將軍) =old ginger (古い生姜)
大王 (王様) =大黃 (漢方薬)	King (王様) =kinsman (親類)
主子 (主人) =肘子 (豚の肘)	Master (主人) =mustard (マスタード)

林も書評で上述の英訳を引用した上で、これらの素晴らしい訳文は熊が西洋人読者の心を掴む決め手だったと指摘した。またこの訳文が裏付けるように、熊は原作を大幅に書き直し、原作にはない登場人物、セリフ、単語を多く付け加えた。従って厳密に言えば、英訳『王宝川』は『紅鬃烈馬』の忠実な英語訳とは言い難く、熊の創作劇と言っても過言ではない。林はこの点をはっきりと認識している。しかし林は、

私が思うに、この翻訳作品の翻訳としての最も並外れた特徴は、物事を英語読者に分かり易く提示する適切で巧みな手法である。(中略) そのような形式の巧みな翻訳がなければ、この劇もロンドンの舞台でこれほどの人気を博さなかったことだろう。<sup>(53)</sup>

と述べ、書き換えることで、熊はむしろこの古典劇の文学性と演劇性をより一層高めたと肯定的に捉えた。つまり劇の種類、演出の時間、役柄の違いなどによっていくらでも書き換えられる自由度の高いこの古典劇は、熊の翻訳家・劇作家としての才能を最大限まで引き出すうってつけの素材を提供したのである。

しかし、以上の書評で熊は、このような忠実性を犠牲にした自由な翻訳は、熊がこの時英訳に取り組んでいた『西廂記』(元・王実甫作)には許されず、中国戯曲の「古典」となった同作品に含まれる大量の詩詞には、シェイクスピア劇を訳すような完全な忠実性が不可欠だと釘を刺した。熊にとって、大学時代の恩師であり、翻訳界の大先輩でもある林語堂からの評価と忠告は何よりも大きな励みになり、次作の『西廂記』の英訳に取り組む指針となったことが容易に想像される。

### 結び：英訳『西廂記』の出版とその後の文学・文化活動

英語圏の演劇界・文芸界での処女作の成功を追い風として、その後、熊はすぐ英訳『西廂記』を出版した。しかし、熊の熱い期待とは裏腹に、この作品は出版当初、バーナード・ショーやジェイムズ・バリーら劇作家の称讃を得た以外、処女作ほど高くは評価されなかった<sup>(54)</sup>。こうして熊はロンドンで古典戯曲の英訳・上演・出版活動を行う一方、「国際ペンクラブ」ロンドン本部主催の昼食会や講演会に頻繁に出席し、同クラブの創設者の一人で女性小説家のC. A. ドーソン・スコット Catherine Amy Dawson Scott (1865-1934) や、長年にわたって同クラブの事務局長を務め、詩人・劇作家であるハーマン・オールド Hermon Ould (1886-1951) と親交を交わした<sup>(55)</sup>。特に戦時中の熊が後者に宛てた数多くの手紙は、彼らの友情の深さを如実に物語る証である<sup>(56)</sup>。これらの手紙で熊は、オールドからロンドン本部主催の昼食会に招待されたことへの感謝を書き記し、さらに『タイムズ』の書評やアバークロンビーによる序文などの切り抜きをも添付し、英訳の『王宝川』と『西廂記』のロンドンでの上演・出版状況を報告するなど、両者の親しい関係が浮き彫りになる。

またこれらの手紙から、オールドの助力で熊は「国際ペンクラブ」の会長で英国文豪H. G. ウェルズ Herbert George Wells (1866-1946) をはじめ、ペンクラブ所属のヨーロッパ各国の作家と緊密な連携を築き、中国代表として1934年に開催された同ペンクラブのエディンバラ大会に参加したことが明らかになった。その後、熊はスペイン、チェコスロバ

キア、スイスなどの世界各地で開催された同クラブの大会にも参加した。なかでも 1938 年のプラハ大会は特筆すべきである。熊はロンドン本部だけではなく、同クラブ中国支部からの特別の要請でこの大会に参加したことが、温源寧からオールドに宛てた電報によって知られる<sup>(57)</sup>。このような中英両国の文化界から強力な応援を得た熊は、「国際ペンクラブ」という公の場で発言し、抗戦中の祖国のために欧米諸国の国民、とりわけ作家やジャーナリストという知識層から人道的支援と同情を得るべく奔走した。

日中全面戦争が勃発した 1937 年以降、熊はロンドンで蔣彝とともに、クリップス夫人こと Dame Isobel Cripps (1891-1979) が立ち上げた「全英援華協会」British United Aid to China Fund (1942-52) の活動に積極的に携わった。また夫人と一緒に全英各地やアメリカを飛びまわり、講演活動を展開し、抗戦中の祖国を物質的にも精神的にも応援し続けた。

一方、この時から、熊は英語の翻訳から英語による創作活動に転じ、1939 年以降に立て続けに英文劇『北京から来た教授』*The Professor from Peking* や長編英語小説『天橋』*The Bridge of Heaven* (New York: G. P. Putnam, 1943) を出版した。『天橋』は林語堂の『北京好日』*Moment in Peking* (New York: John Day, 1939) と同様、晩清から近代までの中国の社会・歴史・文化・国民生活を描く傑作として英米の文芸界から好評を博し、特に H. G. ウェルズに高く評価された。1955 年の末頃、熊はシンガポール南洋大学文学院院長の職を退いた後、香港に渡り、清華学院を創設した。翌年には中国語版の『王宝釧』、1960 年には中国語版の『天橋』を香港で出版した。香港定住後の熊は『八十回憶』(未完) という回想録を執筆し、最初の 4 章を『香港文学』に連載した。この回想録は彼がなぜ文学の道を選び、英国に渡り、上述の中国古典戯曲の名作を英語圏の読書界に送り出したのかの経緯や、ショーをはじめ、多くの英国人小説家、詩人、劇作家、東洋学者との交友関係等を詳細に記録しており、1930 年代の中英知識人たちの文化交流の様相を示す貴重な資料となっている<sup>(58)</sup>。

「ロンドン展」開催前後、英語圏で中国の芸術文化を解説する著述が夥しく出版された。その大半以上は欧米人学者によるものだったが、なかには熊式一、蔣彝、林語堂などのような中国人著者によるものもあった。熊の英訳『王宝釧』と同じく、中国古典書画・詩歌・散文を英訳・解説する蔣、林の著述も同展開催中の英語圏でベストセラーとなった。西洋の文芸界から好評を受けた熊、蔣、林らの英文著述は彼ら個人の才能の賜物だとはいえ、同展が彼らの才能を開花させる絶好の機会を提供したことは間違いないであろう。この点から見れば、熊、蔣、林らはともに「ロンドン展」の「申し子」とも言える。そして何よりも彼らの文筆活動の最も重要な意味は、中国人学者ならではの視点を提示するのみならず、19 世紀以降の宣教師・外交官・新聞記者などの西洋人著述家に独占されてきた中国文化の西洋への伝播の局面を打ち破ったということに尽きる<sup>(59)</sup>。熊に限って言えば、ロンドンでの文学活動は優れた訳文を通して梅蘭芳の訪米公演と合わせ、中国古典戯曲の精髓を英語圏の観衆・読者に伝えることができ、またその後のバイリンガル作家として、アメ

リカや香港などで輝かしい文学・文化活動を展開する出発点ともなった。

【注】

- \* 本稿で引用した外国語テキスト（単行本と雑誌）の日本語訳は引用者による。
- \* 中国語原文の繁体字・簡体字は引用に際し、原則として通行の新字体に改めた。

- (1) 同展については、以下を参照されたい。
  - ・範麗雅「一九三五年の「ロンドンにおける中国芸術国際展覧会」——中国の伝統的芸術、文化に関する英国知識人の言説の検証を指標に」、稲賀繁美編著『東洋意識 夢想と現実のあいだ 1887-1953』京都・ミネルヴァ書房、2012年4月、253-99頁。
  - ・同「多文化間の交渉における外交官の役割：その海賊性について——南京国民政府初代駐英大使・郭泰祺の活動を通じて」（仮題）、稲賀繁美編『海賊史観からみた世界史の再構築』京都・思文閣出版、2017年1月（出版予定）。
- (2) 陳子善「世人誰識熊式一」『時代週報』第1期、2010年1月、8頁。
- (3) デイヴィッド卿と「ロンドン展」との関わりについては注(1)の拙論を参照されたい。
- (4) これらの絵画展の英国巡回展の詳細については、以下の先行研究を参照されたい。
  - ・袁志煌、陳祖恩編著『劉海粟年譜』上海人民美術出版社、1992年3月、130-31頁。
  - ・王震編著『徐悲鴻年譜長編』上海画報出版社、2006年12月、86-199頁。
  - ・Michaela Pejcochova, “Exhibitions of Chinese Painting in Europe in the Interwar Period: The Role of Liu Haisu as Artistic Ambassador,” in *The Reception of Chinese Art across Cultures*, ed. Huang Ying-Ling Michelle, Newcastle upon Tyne: Cambridge Scholars Publishing, 2014, pp. 179-99.
- (5) 「満洲事変」が勃発した1931年から「ロンドン展」の開催が提案される34年までの中・日・英三国を取り巻く東アジアの政治・経済・外交関係については、以下の先行研究を参照されたい。
  - ・Stephen Endicott, *Diplomacy and Enterprise: British China Policy 1933-1937*, Vancouver: University of British Columbia Press, 1975.
  - ・Aron Shai, *Origins of the War in the East, Britain, China and Japan 1937-1939*, Abingdon: Routledge, 1976.
  - ・後藤春美著『上海をめぐる日英関係 1925-1932年——日英同盟後の協調と対抗』東京大学出版会、2006年11月。
- (6) 英語が堪能な熊は「ベルリン中国現代美術展覧会」の英国での開催期間中に行われた劉海粟の講演会の通訳を務め、また以下の芸術誌にも中国文人画論を寄稿した。“An Eastern Viewpoint: Art for the Artist’s Sake. By S. J. Hsiung, Author of *Lady Precious Stream*,” *Apollo*, Vol. 23, No. 131, 1935/11, p. 279; 前掲『劉海粟年譜』130-31頁。
- (7) この劇のヒロインの名前は王宝釧である。熊は英語圏の読者のためにあえて難しい漢字の「釧」（飾り物のブレスレット）を避けて、発音の似た「川」を選んだ。これに合わせて英訳のタイトルも *Lady Precious Stream* にした。



- (8) この点について、以下の資料を参照されたい。
- ・Eduard Erkes, “Book Review: *Lady Precious Stream*,” *Artibus Asiae*, Vol. 6, No. 1/2, 1936/6/12, p. 152.
  - ・鄭達「中国文化的国際使者——記旅美華裔遊記作家、画家、詩人蔣彝」『美国研究』2003年第1期, 1月, 114頁。
  - ・許振南「海外赤子蔣彝先生的一生」『人物春秋』2005年第3期, 6月, 22頁。
- (9) S. I. Hsiung, “Afterthought,” in *The Professor from Peking: A Play in Three Acts; with a Preface by Lord Dunsany*, London: Methuen & Co. Ltd., 1939, pp. 165-66.
- (10) 郭大使の舞台挨拶は実際には文章化されることなく、熊の英文回想録や『天下』創刊号に掲載された林語堂による書評に引用された。S. I. Hsiung, “Afterthought,” p. 169; Lin Yutang 林語堂, “*Lady Precious Stream: An Old Chinese Play Done into English According to Its Traditional Style by S. I. Hsiung*, London: Methuen & Co., 1934,” *T'ien Hsia Monthly*, 1935/8, p. 106.
- (11) S. I. Hsiung, “Afterthought,” pp. 166-67.
- (12) 熊式一「八十回憶」『香港文学』第21期, 1986年4月, 13頁。
- (13) 同上。
- (14) 同上, 14頁。
- (15) 龔世芬「關於熊式一」『中国現代文学研究叢刊』1996年第2期, 1996年4月, 261頁。
- (16) S. I. Hsiung, “Afterthought,” pp. 175-77.
- (17) Chiang Yee, *Memoir*, New York: John Day, 1967, p. 10.
- (18) この点について、以下の先行研究を参照されたい。
- ・龔世芬前掲論文「關於熊式一」260-74頁。
  - ・肖開容「從京劇到話劇——熊式一英訳《王宝川》与中国戯劇西伝」『西南大学学报』(社会版)第37卷第3期, 2011年5月, 149-52頁。
  - ・彭金鈴「一顆頭等水色的寶石——熊式一英訳《王宝川》成功因素探析」『戯劇文学』2013年第1期, 1月, 105-10頁。
  - ・鄭達「百老匯中国戯劇導演第一人——記熊式一在美国導演《王宝釧》」『美国研究』2013年第4期, 8月, 127-33頁。
- (19) 折子戯は、構成の長い劇から抽出された、纏まった筋書きとクライマックスとを持つ一幕(中国語では「一折」と呼ぶ)の短い演目を指す。
- (20) Herbert A. Giles, *A History of Chinese Literature*, Shanghai: Kelly & Walsh, 1901, pp. 262-70.
- (21) Min Tian, *Mei Lanfang and the Twentieth-Century International Stage: Chinese Theatre Placed and Displaced*, New York: Palgrave Macmillan, 2012, pp. 178-212.
- (22) これらの言葉は元々ローレンス・ヴェヌーティ Lawrence Venuti (1953-) の著書 *The Translator's Invisibility: A History of Translation*, London and New York: Routledge, 1995, pp. 19-20 に使われた用語である。ヴェヌーティは19世紀のドイツ人神学者・哲学者・文献学者フリードリヒ・シュライエルマッハー Friedrich Daniel Ernst Schleiermacher (1768-1834) の翻

訳論を踏まえ、翻訳方法について次のように述べている。翻訳を可能にする方法には「異化的翻訳」Foreignization translationと「同化的翻訳」Domesticating translationの二通りがある。前者は「起点言語の文化を重視」source language culture-orientedし、「起点言語の文化」の習慣や原作者固有の言葉遣いをできる限り訳文に残す翻訳法である。これに対し、後者は「目標言語の文化を重視」target language culture-orientedし、訳文をなるべく「目標言語の文化」の習慣に合わせ、読者のために文化や言語による障害を最大限まで取り除く翻訳法である。

- (23) 倫敦中国藝術国際展覧会籌備委員会編輯『参加倫敦中国藝術国際展覧会出品図説』*Illustrated Catalogue of Chinese Government Exhibits for the International Exhibition of Chinese Art in London* (中英対照版), 上海・商務印書館, 1935年5月, 第3冊・書画, 図版43, 46.
- (24) Lascelles Abercrombie, Preface to *Lady Precious Stream: An Old Chinese Play Done into English According to Its Traditional Style*, London: Methuen & Co. Ltd., 1934, p. xxi: “To enjoy the snow! *There* is the essence of the spell Mr. Hsiung casts on our occidental minds; these charming people of his have a secret, which we have not: it is the secret of how to live. And that, while we are in this romance of their lives and fortunes, is what they confer us. It is not a fantastic unreality, this world in which Prime Ministers celebrate New Year’s Day by feasting in the garden *to enjoy the snow*. That would not happen in Downing street; nevertheless, this world of Mr. Hsiung’s, this world in which ‘Precious Stream’ is a young lady’s name, is a delicate and decorous reality; and a profoundly human reality.”
- (25) G. Lowes Dickinson, *Letters from John Chinaman*, London: J. M. Dent & Sons, Ltd., 1901, pp. 18-20; Laurence Binyon, *Painting in the Far East*, London: E. Benn, 1908, pp. 143-44.
- (26) Laurence Binyon, *Painting in the Far East*, pp. 143-44.
- (27) “Familiar essay”とは、18-19世紀の英国で繁栄した“Periodical essay”の伝統を汲んだ散文を指す。書き手が意のままに筆を運び、読者を暖かく包むような心構え、ゆったりとした格調、そして軽妙で機知に富む言語表現等の特徴とする。その核心は「寛いだ会話的」要素の重視である。“Familiar essay”の代表的な作品として、19世紀の英国のエッセイスト、チャールズ・ラム Charles Lamb (1775-1834) の *Essays of Elia* (London: Edward Moxon, 1823), *The Last Essays of Elia* (同上, 1833), ウィリアム・ハズリット William Hazlitt (1778-1830) の *Table-Talk; or Original Essays* (London: John Warren, 1821), *The Plain Speaker* (同上, 1822) などが挙げられる。“Familiar essay”の定義については以下の文献を参照した。
- ・William Hazlitt, “On Familiar Style,” in *The Complete Works of William Hazlitt*, 20 vols., ed. P. P. Howe after the Edition of A. R. Waller and Arnold Glover, Vol. 8 (Table-Talk; or, Original Essays), London: J. M. Dent and Sons, Ltd., 1931, p. 242.
  - ・Dan Roche, “Familiar Essay,” James M. Kuist, “Periodical Essay,” in *Encyclopedia of the Essay*, ed. Tracy Chevalier, London and Chicago: Fitzroy Dearborn Publishers, 1997, pp. 274-75, 650-51.
- (28) 「生」は京劇で男性の役で、善良で年配の役を「老生」と呼び、髭をつける。「老生」ほど重要でない年配の中年の役を「末」、若い男性の役を「小生」と呼ぶ。「揺板」は京劇音楽の一種で伴奏が速いわりに、歌は比較的ゆっくりであり、登場人物が歩きながら歌う場面でよく使われる。

- (29) 「丑」は道化役、または小悪人的な登場人物であり、昔の京劇舞台では、猥褻なセリフや唱詞で観客の笑いを誘い、劇場の雰囲気をも明るくする役柄だった。
- (30) 中国戯曲研究院が1953年に編集・出版した『京劇叢刊』第10集の「前記」によれば、同書収録の「彩楼配」「三擊掌」「母女会」は、元々梅蘭芳の師匠・王瑤卿(1881-1954)の演出本だったことが分かる。しかし、1953年版の「彩楼配」では上記の猥褻な唱詞が削除されたが、1934年、中華図書館が編集・出版した『戯考』第3冊の「彩楼配」には残っている。熊は英訳の際、どちらを参考にしたかを明白に書いていないが、年代が近い点を考えれば、1934年版の『戯考』を参照した可能性が高い。なお、英訳と中国語の原文を読み比べると、熊は英語の脚韻を踏むため、唱詞の順番を変えただけではなく、唱詞の意味をも忠実に訳していないことが判明する。つまり熊はこの古典劇をかなり自由に訳した。しかし、翻訳者の創作とも言えるこの自由な英訳は、むしろ原作のユーモアをそのまま残し、下品さを取り除き、原作に新しい生命を吹き込んだ。詳細は、中華図書館編輯『戯考』第3冊、上海・中華図書館、1934年10月、5頁；中国戯曲研究院編輯『京劇叢刊』第10集（「彩楼配」「三擊掌」「平貴別窯」「母女会」「三岔口」「通天犀」）、上海・新文藝出版社、1953年12月、3頁などの文献を参照されたい。
- (31) S. I. Hsiung, *Lady Precious Stream*, p. 31.
- (32) 「念」は「念白」「道白」とも言い、京劇の中で登場人物のセリフを指す。
- (33) 中国語の原文と英訳は首都図書館編輯『清蒙古車王府藏曲本』（〔第311 涵第2冊：趕三関〕北京・古籍出版社、1991年10月、38頁所収）と S. I. Hsiung, *Lady Precious Stream*, pp. 89-90 に拠る。
- (34) この朗読者も英国観衆の英訳『王宝川』の筋書きを理解させるために、熊が英訳に付け加えた原作にはない役柄である。
- (35) S. I. Hsiung, “Afterthought,” p. 165; Anon., “Little Theatre: *Lady Precious Stream*,” *The Times*, 1935/8/3, p. 10.
- (36) この点について、以下の資料を参照されたい。
- Anon., “At Burlington House: The Art of China, A Revelation of Form and Colour;” “The Soul of China: International Art Exhibition,” *The Times*, 1935/11/28, pp. 15-16; 1935/12/4, p. 16.
  - Frank Davis, “V: Early Pottery at the Chinese Art Exhibition,” “VI: Masterpieces of Sung Painting at the Chinese Art Exhibition,” “XII: Porcelain of Many Periods at the Chinese Art Exhibition,” *The Illustrated London News*, 1935/11/30, pp. 985-97; 1935/12/7, pp. 1036-39.
- (37) Edmund Blunden, “Book Review: *Lady Precious Stream*,” *The Spectator*, 1934/7/20, p. 95.
- (38) Anon., “Little Theatre: *Lady Precious Stream*,” *The Times*, 1934/11/29, p. 12.
- (39) Pearl S. Buck, “*Lady Precious Stream Translated by S. I. Hsiung*,” 〈Asia Book-Shelf Conducted by Pearl S. Buck〉, *Asia*, 1936/3, p. 206.
- (40) *Ibid.*, p. 206: Mr. Hsiung is presenting his translation of this very old Chinese play in the only way in which it seems to me it should be presented. That is, he is not considering it as at all precious and not great literature. Chinese plays have seldom in China been

considered literature as much as a means of amusement, which is always legitimate in Chinese society. By this I do not mean comic amusement but tragic, as life is essentially tragic. It happens that the translation of the play into English also makes literature, just as it is really literature in China, although it is not so held to be there, because it does not conform to Chinese conventional literary vocabulary and structure. But the play has, as Mr. Hsiung truly says, moved millions to tears and pleasure and it will be interesting to see if the simplicity of its feeling and the gaiety of its manners will again move people on another side of the sea. At any rate, this exposition of Chinese dramatic art is in its way as important as any picture in the exhibition of Chinese paintings at Burlington House. And, if the acting of the play is as skillfully done as the translation, it cannot but be successful.

- (41) Wen Yuan-ning 温源寧, “*Lady Precious Stream* By S. I. Hsiung, Published by Methuen & Co., Ltd. London, 1933,” *The China Critic*, 1934/12/20, p. 1244.
- (42) *Ibid.*, p. 1244.
- (43) Anon., “*Lady Precious Stream: A Chinese Drama Now Translated into Foreign Production.* By S. I. Hsiung,” 『良友画報』第115期, 1936年3月, 4月合併号, 43頁。衛詠誠「倫敦『宝川夫人』観演記」, 同「轟動欧美在倫敦連演六百次的中国古劇」『良友画報』第118期, 1936年7月, 24-25頁。
- (44) Lin Yutang 林語堂, “*Lady Precious Stream* (Played by a Chinese Cast, under the Direction of Aline Sholes and S. Y. Wong, Produced by the International Arts Theatre on June 25-26 at the Carlton Theatre, Shanghai,” *The China Critic*, 1935/7/4, pp. 17-19.
- (45) この点については、以下の資料を参照されたい。
- Yao Hsin-nung 姚莘農, “Exit *Lady Precious Stream*,” “Mr. S. I. Hsiung: Interviewed by Lin Yin-Feng 林引鳳 in (Weekly Interviews),” *The China Critic*, 1935/12/12, pp. 249-52; 1937/1/7, pp. 16-18.
  - Ch’ien Chung-shu 錢鍾書, “Tragedy in Old Chinese Drama,” Ch’ien Shou-yi 陳受頤, “*The Chinese Orphan: A Yüan Play: Its Influence on European Drama of the Eighteenth Century*,” *T’ien Hsia Monthly*, 1935/8, pp. 37-62; 1936/9, pp. 89-116.
- (46) Lin Yutang 林語堂, “*Lady Precious Stream: An Old Chinese Play Done into English According to Its Traditional Style by S. I. Hsiung*,” pp. 106-10.
- (47) *Ibid.*, p. 106: China seems to be in luck with the London public this year. As Ambassador Quo Tai-chi puts it, the year 1935 seems to be the “China Year” in London. The unstinted praise and cordial welcome given to Mr. Hsiung’s play seem to augur well for a deeper understanding of the more intimate and leisurely aspects of Chinese life. With the beautiful English of Mr. Hsiung’s version and the spirit of jollity of *Lady Precious Stream*, the Western artistic world is now familiar. It will be our purpose to examine how much credit for the success of the play is due to the Chinese original, and how much of it to Mr. Hsiung’s talent as a translator of great fluency and a playwright with a good knowledge of theatrical

- technique, both Chinese and Western.
- (48) *Ibid.*, pp. 107-108: One thing is certain, and that is, Mr. Hsiung is no servile translator, but is here partly a creator himself, with the first, fine frenzy of light-hearted youth, which does not know what literal accuracy means. Otherwise his brilliant English would not be possible.
- (49) 諧音詞とは、中国語では同じ発音だが異なる漢字で表記され、異なる意味を表す言葉を指す。
- (50) 「老頭児玩火球」は北京の童謡に基づくセリフであり、歌詞は以下の通りである。「老頭児老頭児玩火球，燙了尻股抹香油，老頭児老頭児玩火炭，燙了尻股抹鷄蛋！」（爺さん爺さん，火球で遊び，火傷したお尻に香油を塗り，爺さん爺さん炭で遊び，火傷したお尻に卵を塗り！）。出典は『児童歌曲串焼 50 首』URL: <http://www.baobao88.com/bbmusic/erge/09/2229757.html> に拠る。
- (51) 「将」と「姜」の発音 (jiang) の類似 (諧音詞) に基づく駄洒落。以下同。
- (52) 中国語の原文と熊の英訳は、前掲の首都図書館編輯『清蒙古車王府藏曲本』第 311 函第 2 冊：趕三関, 39 頁; S. I. Hsiung, *Lady Precious Stream*, pp. 96-97. Lin Yutang's "Book Review," pp. 109-10 の引用に拠る。
- (53) Lin Yutang 林語堂, "Book Review," p. 108: The most singular characteristic of the translation as a translation, I think, is its apt and happy manner of making things clear to an English audience [. . .]. Without that type of happy rendering, the play would not have gone off so successfully on the London stage.
- (54) S. I. Hsiung, "Afterthought," pp. 182-83.
- (55) *Ibid.*, pp. 167-68. この回想録では、熊はドーソン夫人を英訳『王宝川』の出版を促した「名づけの母」Godmother と称した。
- (56) S. I. Hsiung's Letters to Hermon Ould, July 9, 1933; July 17, 1933; November 4, 1933; December 30th, 1933; April 7, 1934; April 25, 1934; May 4, 1934; June 4, 1934; June 7, 1934; July 2, 1934; September 22, 1934; September 28, 1934; March 6, 1935; April 25, 1935; May 14, 1935; June 18, 1939; June 26, 1938; October 17, 1938; August 27, 1945, in the Archives of P. E. N. Club of China, Harry Ransom Human Research Center, The University of Texas at Austin.
- (57) Wen Yuan-ning's Letter and Wire to Hermon Ould, May 21st, 1938 (同上所蔵)。
- (58) 熊式一著／陳子善編『八十回憶』北京・海豚出版社，2010 年 10 月，64-67 頁。
- (59) 蔣，林らの英語による著述活動と「ロンドン展」との関連については、別稿で詳論する予定である。

[付記] 本稿は 2013 年度～2015 年度文部科学省科学研究費（基盤研究 A 「海賊史観から交易を検討する：国際法と密貿易——海賊商品流通の学際的・文明史的研究」JSPS KAKENHI: 25244011 研究代表者＝国際日本文化研究センター・稲賀繁美）による成果の一部である。なお、早稲田大学の平林宣和教授、東京大学教養学部の波多野真矢女史、ヒューストン在住の筆者の親族がそれぞれ多忙なスケジュールの合間を縫って貴重な資料を提供し、また一部の拙訳を訂正してくださったことに対し、この場を借りて心から感謝の意を表したい。

【図版写真】



写真1：熊式一の英訳『王宝川』  
右の口絵は画家・徐悲鴻による。  
出典：S. I. Hsiung, *Lady Precious Stream*,  
1934.

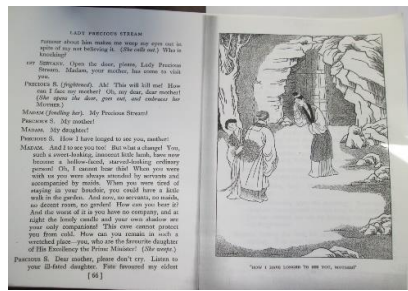


写真2：蔣彝が描いた12点の挿絵中の1枚  
『探寒窟』（第2幕）。  
出典：同左。



写真3：英訳『王宝川』の初上演の舞台写真  
(第1幕)  
英国舞台映画俳優ロジャー・リヴジーが薛平  
貴，舞台女優メイジー・ダレルが王宝釧を演  
じる（1934年11月27日ロンドンのリトル・  
シアターにて）。  
出典：百度百科  
URL: <http://www.baidu.com>



写真4：左より，アメリカ人バス・バリトン  
オペラ歌手ポール・ロブスン，ハリウッドの  
中国系アメリカ人女優アンナ・メイ・ウォン，  
ロブスン夫人（？），熊式一，梅蘭芳，劇作  
家餘上沅（1935年のロンドン）。  
出典：同左

熊式一のロンドンにおける文学活動  
—— 中国古典戯曲の英訳・出版・上演を手掛かりに ——



写真5：左より熊式一，ハンガリー出身の映画監督Gabriel Pascal，G. B. ショー，英国人舞台映画女優ウェンディ・ヒラー（1941年のロンドン）。

出典：百度百科

URL: <http://www.baidu.com>



写真6：「万国芸術劇院」が1935年6月25・26両日にかけて上海のカールトン劇場で英語劇『王宝川』を上演した舞台写真。王宝釧を演じたのは上海社交界の名媛・唐瑛女史である。

出典：『良友画報』第107期，1935年7月。